

平城宮跡出土の金銀蒔絵製品

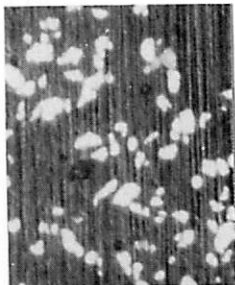
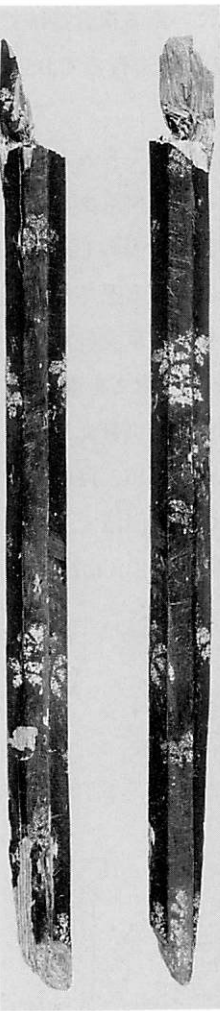
平城宮跡発掘調査部

ここに紹介する蒔絵の製品は、平城宮東大溝 SD 2700から1986年7月に出土した(本文26頁参照)。器物の一部をなす八角の棒状品で、両端を折損し、直径1.5cm、現存長20cm。黒漆地に、金銀粉を蒔き、植物文様の一種、花卉文を表す。金粉はやや角を整えた粉で、ほぼ純金である。金粉には少量の銀粉を、銀粉にはやはり少量の金粉がまじる。銀粉は錆化のためか漆面より盛り上がるので明らかではないが、金粉表面には炭による研ぎあしがあり、一部に研ぎ残りの漆膜が残る。

花卉文は、一茎の両側に葉を2ないし3葉(先端は花か)出す絵柄であり、微妙な違いだが、対生と互生を描き分けているようである。金蒔絵は一茎の花卉文を1単位とするが、銀蒔絵は三茎の花卉文を1単位とし、さらにこれらを上下に配している。正倉院宝物の中に、本例の花卉文と同じ文様は見当たらないが、似た雰囲気のもの、吹絵紙や桧金銀絵経筒の文様に一部ある。本例の樹種はヒノキ。木胎の表面に布着せはない。年代は出土層位からみて奈良時代後半から末である。

蒔絵は、生漆で文様を描き、大小さまざまな粗いヤスリ粉を蒔き、漆を数回かけた後、炭で文様を研ぎ出す技法をいう。日本では奈良時代が初現とされるが、この時代の遺品は正倉院宝物の金銀鈿装唐大刀と法隆寺献納宝物の矢柄の二例だけであった。このうち法隆寺例は黒漆地に金のヤスリ粉を蒔いた(蒔放し)技法であるから、大刀の鞘上に、走獸・含綬鳥・雲文・唐草文・花枝などを蒔絵により表す正倉院例が当代蒔絵の代表と言ってよい。金銀鈿装唐大刀は、天平勝宝8歳(756)6月、光明子が聖武遺愛の品々を東大寺に納めた『献物帳』の註記に、「鞘上末金鏤作」とあり、蒔絵と呼ばずに特に「末金鏤」と呼ぶ。この末金鏤の金粉は、稜角が多く、大きさ形も大小さまざまあり、未調整のヤスリ粉を蒔いた結果、との指摘がある^注。これに比べ、本例の金粉は形や大きさがやや整っており、研ぎ下したヤスリ粉をある程度調整した可能性もある。篩による選別や、調整したヤスリ粉の使用は、従来の知見では後出の要素というから、本例が初期蒔絵技法解明に果たす役割は大きい。いずれにしても、数少ない奈良時代蒔絵に貴重な一資料を加えたと言える。

(金子裕之)



金銀蒔絵製品

上 全形(実大)

下 金蒔絵の拡大(×15)

注：荒川浩和「末金鏤の粉について」『正倉院の漆工』(平凡社)1975